

# 十字路

米国では利下げ期待からアニマルスピリットが回復し、かたや日本ではインフレ期待がアニマルスピリットを刺激するといった声が聞かれる。

アニマルスピリットを表す指標のひとつとして、米国には株価、消費者信頼感、長短金利差、株価変動性、経済政策の不確実性を合わせた指数がある。5つの構成要素の足元の勢いをみると、3勝0敗2分けといった感触だ。

国内には企業の生産予想の強気から弱気を差し引いた経済産業省の指標がある。足元は回復基調だが、米国流に5

## アニマルスピリット

つの要素でみれば、国内株価の急伸と消費者態度の回復を除きまだ物足りない印象だ。

それにしても本来アニマルスピリットとは指標の枠をはみ出すものではなかったか。その実態は何だろうか。

英作家のC・フォスターは動物になり切ることでの精神の理解を試みた。都市の片隅で動物と一緒にゴミをあさったが、警官に追い立てられて探求はたびたび中断した。

トレーダーから神経科学の道に進んだJ・コーツはホルモン分泌や脳腸相関を挙げ、頭より先に身体が反応する結果だと説明する。

経済学者のG・アカロフとR・シラーは安心や不安、邪心などの感情に加え、貨幣錯

覚をアニマルスピリットの背景にみる。貨幣錯覚とは、例えば賃上げでインフレが上乘せされても実質購買力は増えないのに、所得が増えたと錯覚して消費を増やすといった現象だ。

株価形成にも貨幣錯覚が働くという仮説がある。インフレ見通しがある時に、企業利益の従来予想を名目金利で割り引くことで、適正株価を低く見積もるようなケースだ。

もっとも、錯覚で説明できずしてしまえばアニマルスピリットは既に死んだも同然だ。分析はともあれ、愚行をも許す寛容さがあるからこそ動物は生き生きと動き始めるだろう。

(タスク・アドバイザーズ

社長 眞保 二朗)